

大齋節の私達の目標は、私達それぞれがイエス様との出会いを果すことです。さて、私達がイエス様との出会いを果すというのはどういうことなのでしょう。私達が他の人と出会うこととは違うのだろうけれども、イエス様はどのように私達に語りかけてくださるのだろうか？ 私たちにはそんな思いがあるのではないのでしょうか。本日の福音書には救いイエス様との出会いを果した一人の、サマリアの女性の物語が記されておりましたが、私達がイエス様との出会いを果すうえで重要な記事です。

場面はヤコブの井戸の近くです。この世的に見ればイエス様はユダヤ人の一人としてこの世に来られましたが、実は当時、ユダヤ人はサマリア人と交際していませんでした。これは旧約時代の歴史にさかのぼる大変根の深い問題でした。紀元前8世紀頃の旧約時代、当時強大国として君臨しておりましたアッシリア帝国は、聖書の舞台の北半分であります北イスラエル帝国に攻め入り、とうとう滅ぼしてしまいます。その後アッシリアは北イスラエル王国の首都であったサマリアにアッシリアの人々を住まわせ、残留の人々との間に混血が生まれました。これがサマリア人の祖先です。

一方南ユダ王国にいた人々の子孫は、紀元前4世紀頃にユダヤ人と呼ばれるようになってきますが、血筋を重んじるユダヤ人にとって、サマリア人はもはや自分たちの同胞ではなく、主なる神を裏切った民と決め付け、交際をしていなかったのです。

こういうわけで福音書の箇所のように、イエス様とサマリアの女性が話をしているのは当時の人々に考えにくいことでしたし、ましてこの女性が救いイエス様との出会いを果されるというのはさらに考えにくいことだったのです。

さて、誰にも知られたくない、自分でも触れたくない部分があるものです。この女性にもそういうところがありました。イエス様はそのことを知っておられたようです。それまで井戸の水の話をから主なる神が与えてくださる乾かない水、すなわち聖霊についての話をしていたイエス様は、突然、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われました。そしてイエス様は言われました。

「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」

これはこの女性にとって一番他人に触れてもらいたくないことでした。これはこの女性にとって人生最大の傷とも言えることでした。他の人がいたずらにそれを触れば、更に深く傷つけることになります。

しかしイエス様はそれにあえて挑戦なさいました。この女性の触れられたくない部分をはっきり指摘されたのです。それは腫れ物に触るようでもなく、遠慮するようでもなく、単刀直入な指摘でした。

しかしイエス様は、「何故そんなことをしたのか、何故人の道を外れたことをするのか…」などこの女性を責めることはしませんでした。そうではなく、イエス様はただ、「あなたの見せたくない姿をしっかりと見つめて私のところに来なさい…」と言われたのです。イエス様と女性の最後の会話はこうなっています。

女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

私達は自分の中にある罪の部分、足りない部分を隠そうとします。それは人に知られた

くないことですし、知られたならば、知った相手がそれを逆手にとって自分を責めてきたり、人にうわさを立てられたりするならば自分がもっと傷つくことになるからです。イエス様は、そのようなことはなさいません。その事実だけを持っていけばよいのです。イエス様はそのような私達を暖かく包んで、救い主との出会いを果させてくださるのです。これが本日の福音の約束なのです。私達の見せたくない部分、すなわち開けずにいる自分、一生懸命閉ざしている自分を開いてイエス様の御言葉に触れるとき、私達はイエス様との出会いを果すことが出来、喜びが与えられるのです。安心して私の元に来なさい。そして解放されなさい、喜びなさい。イエス様はそう私達に言うておられるのです。イエス様との出会いは、実に自分自身を見つめることから始まるのです。